

厳島神社：刀

日本の歴史のほとんどにおいて、刀と神社は緊密な関係を共有してきました。武器は神体として崇拝されてきました。名古屋市にある熱田神宮が有名な例です。三種の神器の1つに数えられる、伝説的な草薙剣を祀る古い神社です。刀剣は、靈威を持つ神聖なものとして神（神社）に捧げられていました。しかし、より一般的には、祈りの効果性を向上させたり幸運への感謝を示したりするための贈り物でした。この慣行は平安時代（794～1185 年）末期に出現しました。武家の影響力が増大し、貴族階級の影響力が陰りを見せ始めた時です。サムライが戦場での成功を祈るために刀を寄進したのです。そのような寄進は、信仰の大きな表明でした。なぜなら、刀は武士にとって最も貴重な所有物である場合が多かったからです。

厳島神社はそのような刀を 200 点以上所有しており、そのうち 2 点は国宝に指定されています。これらの武器は平安時代末期から江戸時代（1603～1868 年）にかけて寄進されたものであり、武家のあいだで厳島神社に対する変わらぬ感謝と信仰があったことを示しています。これらの刀の多くは、大内家、毛利家、浅野家といった安芸（宮島が属する）の歴代の支配者が贈ったものです。大内氏と毛利氏は、1500 年代に貴重な武器を寄進したことで特に注目されます。戦国大名は天下を取るために競い合い、刀が本来の戦い目的のために必要とされていたからです。